早稲田商学第320号
昭和62年1月

フェミニスト文学批評について

——アメリカの場合を中心に——

小　林　富久子

私達は，文学を初めて女の立場から読むように求められているのです。これまで，私達は皆——男も女も博士号取得者も——文学を男の立場から読んできたのです。

キャロリン・ヘイルブラン(1)

これは今日のフェミニスト文学批評（Feminist Literary Criticism）の出発点をなしたケイト・ミレットの『性の政治学』に寄せられた言葉である。この本が出されたのが1970年だから，以来早くも十数年が経過したことになる。その間フェミニズム（Feminism）を基盤とする文学批評は，母体ともいうべき女性解放運動自体が徐々に沈静化しつつあるのとは対照的に，現在欧米では，既成の批評界全体の流れをも変えうるものとして，男性批評家達からも期待されるに至っている。(2) 本稿では主としてこれまで米国で出されてきた代表的な文献をもとに，これまでフェミニスト文学批評がいかなる展開を示してきたかについて，様々に異なる立場や論点，あるいは，問題点等を整理しつつ，明らかにし，かつ，将来への展望についても考察してみたい。その際，先ず，第一章では，フェミニスト文学批評の簡単な定義づけ，並びに，前提の説明を行い，第二章では成立に至る歴史的経緯，社会的背景を考察し，第三章では今日までのフェミニスト文学批評の展開を三つの段階に分けて検討し，更に第四章では，全体の総括，並びに，今後の展望について述べるという順序をとることとす

る。小論が，フェミニスト文学批評をより馴じみ深いものにすると共に，米英文学を別の角度から理解するための一助となれば幸いである。

I．フェミニスト文学批評とは何か？

これまでの文学批評が常に圧倒的に男性主導の領域であったという事実に，疑いをはさむ者は少いだろう。実際このことは，各国の批評史をふり返り，過去の「偉大な」男性批評家達の系列に何人の女性批評家が入りうるかを一考するだけで明らかになるからである。ところが，文学作品を「書く」，あるいは，「読む」という領域に目を移すと，多分に趣きは異なってくる。過去の文学史において数多くの女性作家が登場してきていること，また，女性向けの作品が数限りなく出されてきていること等々は，女性が後の二つの領域では，相対的に重要な役割を演じてきた事実を物語るものといえよう。

しかし，ここで注目しておきたいのは，長らく集団として批評の分野から遠ざけられてきた結果，女性は，作者，あるいは，読者として，私的に作品に向き合うにあたっても，自らの外の（即ち，男性の）世界で形成される文学評価上の価値基準を絶えず意識するよう迫られ，特殊な緊張感や圧迫感を味わいがちになったという事実である。作家として，そうした感覚を最初に赤裸々に表明したのは，『私だけの部屋』におけるヴァージニア・ウルフであった。自らの最も内的なヴィジョンを，過去の因習に捉われない独自の形式に表現しようとしたウルフですら，“Oxbridge”と彼女が呼んだ，いわば，「女人禁制」の強力な男性エリートの世界から指し示される文学上の規範と，いかに折り合いをつけるかで重苦しい思いを感じ続けたことが，このエッセイから読みとれる。(3)

ウルフをはじめ，過去の多くの野心的な女性作家を悩ませたものは，客観性，論理性，外向性，度量の大きさといった一連の特徴をもつとされる男性作家を「主流」とみなし，逆に，主観性，直観性，内向性，控え目さといった特徴を

もつとされる女性作家を「亜流」とみなす，古くからの二分法であった。このため，彼女達は，往々にして，（例えば，性的に控え目な表現を心がけたウルフのように）「女性的」とみなされる特徴をもつ作品を書くことで「亜流」の地位に甘んずるか，あるいは，（男性名をペンネームに採用したジョージ・エリオットのように）それに抵抗して，「男性的」な要素を取り入れることで，「女らしくない」作家とみられるか，いずれにしろ，有難くない二者択一を迫られたのである。

また，読者としての女性も，同種のディレンマに陥りがちであったことが指摘される。仮にある女性読者が，「女性のありうべき姿」を描いたものとして世評の高い男性作家の作品内に登場する女性人物（例えば，フォークナーのディルシーやヘミングウエイの一連のラブ・ストーリーのヒロイン達）に馴じめないものを感じた場合，無理矢理，その人物に自己を同一化させるか，それが不可能な場合には自らが女として「欠けた」存在ではないかという疑いをもつというわけである。

過去において，そうした指摘がわずかな例外を除いて，女性の側からも，殆どなされることがなかったことの理由は明白である。それは元来男性が一方的に定めたにすぎない文学評価上の価値基準を，女性自身が，知らず知らずのうちに，「普遍的」なものとして内面化してきたことによる。

フェミニスト文学批評とは，以上のような認識をもとに，これまでの男性中心の文学作品や批評における偏りや歪みを明らかにした上で，文学作品内の女性像や，女性作家に関して，女性自身の視点から改めて掘り下げ，かつ今後の望ましい文学評価上の基準を模索しようとする営みをも含むものである。

II．成立に至る歴史的経緯と背景

「フェミニスト文学批評」という名称自体が市民権を得たのは最近だが，同種の試みが過去において全く皆無であったというわけでは無論ない。すでに14

世紀,『バラ戦争』において提示された「醜悪な」女性像に対して，フランスのクリスティーヌ・ド・ピザンが「理性・公正・正義」の名において抗議の文を書いており，これが一般に現存する最初のフェミニスト文学批評の試みとされている。(4) その後，各国の指導的なフェミニスト思想家達が，断片的に女性と文学について言及した例がみられるが，本格的なフェミニスト文学批評の到来をみるには，二十世紀前半の英・仏に，各々，ヴァージニア・ウルフとシモーヌ・ド・ボーヴォワールが現われるまで待たれねばならなかった。

周知のように，男性に映ずる「他者」としての女性の存在のあり方を明らかにし，女性の完全な自立の必要を説いたボーヴォワールの『第二の性』は，先述のウルフの『私だけの部屋』と共にフェミニスト文学批評を志す者が，今後とも，立ち返るべき原点のようなものを意味する書といってさしつかえないだろう。ただし，両者にとって惜しむべきことは，いずれも直接の後継者をもちえなかったという事実である。もっともこのことは，両者が，多分に，自らの書を同性の読者よりも，むしろ，周囲の知人の男性エリートに向けて書いた趣きがあることから，ある程度，致仕方ない事とも受け取られよう。彼女達の時代の英・仏には，一部の恵まれた階級に属する「目ざめた」女性達を除けば，女性の創造性や自立といった話題について耳を傾けうる同性の数は未だきわめて限られていたのである。

これに対して，二十世紀も後半に入り，女性解放運動がかつてない程膨大な数の一般女性を巻き込みつつあった1970年代前後の米国では，フェミニスト文学批評が本格的に受け入れられる土壌は十分に出来あがっていたといえよう。今回の女性運動の一つの顕著な特色は，当初から，文化運動としての側面が大きく打ち出されていたことである。即ち，女性が真に解放を求めるなら，これまでのように社会的政治的レベルでの改革を外に向けて要求するばかりでなく，自らを，意識の内側から呪縛してきた女性性(フェミニティ)の神話からの解放が図られねばならない。そのためには，そうした呪縛をもたらすに至った様々な文化的・社会

的条件付けのメカニズムを，その根元から解明することが必要となる。こうして，これまで女性の神話作りに，背後から「学問的」権威付けを与えてきた男性主導の学問・芸術の諸分野も，改めて検討の対象となり始める。女性の視点から，これまでの男性主導の学問体系を根本的に問い直そうとする「女性学」(Women's Studies) が誕生するに至ったのは，以上のようないきさつからであり，このような女性学的立場を文学研究の領域にとり入れたものが，フェミニスト文学批評であることは，言うまでもない。『性の政治学』の出版をみた1970年に Modern Language Association で，「フェミニスト文学とフェミニン意識」と題する作業部会がもたれ，以後各地の大学で「女性と文学」に関する講座が次々と開設され始めると，それに呼応するように，女性研究者の手になるフェミニズム的視点に基づく研究書・批評書が堰を切ったように出版され，フェミニスト文学評批はその存在を公けに認められるに至ったというわけである。(5)

これらの批評書や研究書の大半は，もはや単に男性に「抗議」し，「理解と同情」を求めるといった類いのものではない。もはや自らの先達のように孤独な存在でないフェミニスト批評家達は，史上初めて，男性の「権威ある眼」から解き放たれ，文学研究を通して，女性であることの意味について語り合う場を得ることにより，批評史に新たな頁をつけ加え始めたのである。

III. フェミニスト文学批評の三つの流れ

これまで米国内で出されたフェミニスト文学批評の著書・論文の数は，大ざっぱに言うと，次の三つのグループに大別されうるように思われる。

1. 過去の「男根的」な文学作品，批評を批判するもの
2. 望ましいフェミニスト的な基準を模索する種類の批評
3. 女性作家中心のアプローチをとる批評

以下においては，上述の各々のグループの代表的な文献にあたりながら，こ

れまで米国においてフェミニスト文学批評がいかなる展開を示してきたかをみてゆくことにする。

1. 「男根的」な文学作品や批評への批判

このグループの批評は，過去の男性主導の文学作品や文学批評における歪みや欠落を批判し，是正する種類のものである。このうち最も初期に発達し，最もポピュラーなものは，著名な男性作家の作品内の女性像，あるいは男女の描き方に焦点をあてるものであり，中でも関心を集めてきたのは，文学内における女性の紋切り型（Female Stereotypes）にまつわる問題である。

すでに男性批評家のレズリー・フィドラー等からも指摘されたように，西欧文学では，伝統的に，女性を，「魔女」「聖女」「大地母神」，「清純な乙女」「ビッチ“Bitch”（あばずれ女）」，「ダーク・レイディ」「フェア・レイディ」という風に，人間的な肉付けや複雑さに欠ける一連の固定した型（タイプ）として提示する傾向が存在してきた。これらの紋切り型（ステレオタイプ）としての女性像は，いずれも，女性を，生殖機能——あるいはその有無——のみの角度から捉えようとする従来の因習的な男性の固定観念に立脚した偏った女性観を反映するもので，いわゆる「女性性（フェミニティ）」の神話を広めるのに大きな役割を果した元凶ともいえる。フェミニスト文学批評家が特に関心をもつのは，そうした紋切り型がいかに生み出され，かつ，かくも長きにわたって存在してきたかを解くことにある。

ケイト・ミレットは，その原因を，『性の政治学』において，いつの時代にも変わることのない男性の権力志向，女性支配への意志に帰している。疑いもなく，この種の批評の古典とみなされる本書で，ミレットは，ロレンス，ミラー，メイラーの作品をとり上げ，各々の作品に登場する純粋に性的な対象物（Sexual Object）としての女性の人物と明らかに作者の分身とおぼしき男性ヒーローとの間に交わされる性描写の場面を細密に分析することで，それらがいずれも男性を主人（マスター）＝征服者，女性を従者＝被征服者とする外部世界の権力構造をそのまま二重写しにして提示していることを指摘した。つまり，ロレンス，

ミラー，メイラーという今世紀の英米作家中でも屈指の価値攪乱者として知られた三者が実は牢固として存続してきた旧い体制の頑強な維持論者に他ならなかったことが指摘されたわけで，本書は各国の読者に大きな波紋を投げた。ちなみに，ミレットはフランスの同性愛作家のジャン・ジュネこそ，従来の男女関係を含む既成の父権制的な権力構造全体を一新させる真の価値攪乱者であるとの見方を明らかにしている。

今日では，男女関係のすべての現象を，権力闘争の面のみから捉えようとしたミレットの見方そのものは，フェミニスト批評家達からも短絡的にすぎるとの批判を受け，様々な修正意見が出されるに至っている。例えば，キャサリン・ロジャーズは，女性の紋切り型を助長する男性の女性嫌悪（ミソジニー）の伝統の原因として，この他，(1) 性行為そのものに対する男性の罪悪感，(2) 女性の偶像視に対する反動，の二点をあげており，[6] さらに，ドロシー・ディナースタインやナンシー・チョドロウは，育児が母親の占有物になった結果，息子としての男性が母親＝女性に依存しすぎ，それが男性の女性に対する歪んだ幻想の原因となっていることを指摘している。また，マーサ・マシントンとチャールズ・マシントンは，現代文明の担い手たる男性が，自然からますます疎外感をおぼえるようになり，それを克服すべく，「産む性」としての女性を「自然」にみたて，その「無垢さ」，「おおらかさ」に救済を強く求め始めたことが，とりわけ現代文学に様々な紋切り型を氾濫させる原因となっていることを指摘している。[7] この場合，女性は必ずしも嫌悪や蔑みの対象とはならず，むしろ，ディルシーのように，賞賛の的となることも多いのだが，ここでも留意すべきことは，自意識をもち，悩み，迷い，変化するのは，常に男性ヒーローであり，女性の登場人物はその背景に固定したままという事実である。

こうした様々な修正意見にもかかわらず，トリル・モアは，『性の政治学／テキストの政治学』の中で，ミレットが文学批評家として次の二点で後継者達に大きく貢献したとしている。一つは，社会的・文化的文脈の中で，作品を読み

とることの重要性を印象づけ，従来そうした読み方を否定してきた新批評（ニュー・クリティシズム）の方法の限界を示したことであり，そして，今一つは，未だ作者の意図が絶対的な権威をもつとみなされていた時期に，作品をいかようにも読みとりうる読者の権利を肯定したことである。[8] これら二つの「読み」へのアプローチが，今日，フェミニスト文学批評ばかりでなく，フランスを中心として発達した構造主義や脱構築論といった前衛的な批評理論の前提ともなっていることは周知の事実である。

ミレットは，かつて既存の男性の女性観における歪みや偏りが明るみに出され，公けの論議の対象となれば，変化への契機がもたらされるといった主旨の希望を表明したが，果たして，上にみてきたような論議がすべて出尽せば，文学上の紋切り型は消滅するのだろうか？[9] それとも，新たな紋切り型が登場しうるのだろうか？ それは今後のフェミニスト批評家達が見守るべき課題として残されている。[10]

以上，過去の文学作品の女性像を批判する種類の批評をみてきたが，第1番目のグループにはもう一つ，過去の男性主導の批評自体を批判し，是正する種類のものが含まれる。『女性について考える』を著したメアリー・エルマンは，すでに1968年に，これまで男性中心になされてきた批評を『男根的批評』（フォーリック・クリティシズム）(Phallic Criticism) と名付け，従来の批評における客観性，あるいは，中立性の概念に疑問を投げかけている。[11] これまでのところ，フェミニスト批評家達による既存の批評への批判は，当然ながら，女性作家の評価にまつわるものに集中した感があり，フェミニスト批評家達は，女性作家を，その性別のために「亜流」として落しめたり，あるいは，「女らしくない作家」のラベルを貼ったりすることで生じてきた従来の批評の歪みを批判すると共に，そうした批評によって，これまでの文学史上，不当に無視されたり，忘れ去られたりした女性作家の正当な再評価や発掘を行うための作業を精力的に推し進めている。中でもヒロインの性＝生への覚醒を赤裸々に描き，道徳的に不適な作品として

長らく追放の憂き目にあってきたケイト・ショパンの『目ざめ』(1900)の発掘は，この方面での最も顕著な具体的な成果と目されている。

2. 望ましい基準を模索する批評

第2番目のグループのフェミニスト文学批評は，女性の側から，望ましい文学作品の規範・基準を探ろうとするものである。これに「指示的批評」(Prescriptive Criticism) という名称を与え，初期の段階から，その重要性を指摘してきたのは，シェリ・レジスターであるが，[12] この他，キャロリン・ヘイルブランやキャサリン・スティンプスンといった著名な批評家達も，この批評の擁護者として知られている。彼女達は，いずれも，このグループの批評が，すでにみてきた第一番目のグループの批評の次の段階で発展すべきものとして位置づけており，その理由として，以下の二点をあげている。

先ず，第一番目のグループの批評は，どちらかといえば，過去に目を向け，女性自体を扱うより，男性並びに男性文化に内在する問題点を批判することに努力を傾けがちであったのに対し，第二番目のものは，より未来志向型で内部志向型の批評であるという点，また，第一番目の批評がこれまでの性差別主義への怒りの感情を出発点とするために，否定と破壊がその基調となりがちであったのに対し，第二番目のものは，より積極的で創造的になりうるという二点である。

それでは，望ましいフェミニスト的文学作品の基準は何かという肝心の問題に関してであるが，未だ殆どの研究者が明快な解答を得ていず，まして，合意が得られるには至っていないというのが現状である。現在，この批評がかかえる課題は，次の二点に収斂されるように思われる。

1) 女性にとって「真正な」(Genuine) 文学，あるいは「真正な」女性の登場人物とはいかなるものか？

2) 女性特有の文体，あるいは，言語を理想的な形式として追求することの是非

1)に関しては，シェリ・レジスターによれば，「女性の経験」，「女性の意識」，「女性の現実」（ベティ・フリーダン）を，生々しく表現したものが，女性にとって「真正な」作品であるという見方があるようだが，この基準は，余りにも抽象的にすぎ，同じ女性でも，年齢，階層，職業によって，きわめて雑多であることを無視しているという難点がある。またレジスター自身も述べる通り，「個々の女性主人公の内面の正当性をはかるのは不可能であり，適切でもない」[13] というべきであろう。ただし，従来の男性の視点から書かれた作品に欠落していた種類の女性の人物像を含む作品として，フェミニスト批評家達があげているのは，次のようなものである。

a）男性の性的願望やファンタジーの投影としてのみの女性の性の描写ではなく，女性自身の立場から自らのセクシュアリティ（Sexuality）を扱ったもの（例えばエリカ・ジョングの『飛ぶのが怖い』等々）

b）女性特有の生理的領域——出産，生理を扱ったもの（シルヴィア・プラス，ダイアン・ワコスキー等々の現代女性詩）

c）ブラザーフッド（Brotherhood）ならぬシスターフッド（Sisterhood）を扱ったもの（メアリー・ゴードンの『女の仲間たち』等）

d）女性の視点から書かれた未来小説（マージー・ピアシーやアーシュラ・K・ルグインによる S.F. 小説）

次に第二番目の課題すなわち女性的な文体・言語の是非の問題だが，これについても，現在，三つの異なる立場から議論がなされており，未だ結論が出されるには至っていない。先ず，第一番目の立場は，これまで女性の特性とされてきた種々の性格（受身的，直観的，非論理的，無定形的等々）は，社会的，文化的に規定されたものにすぎず，それ故，今後女性作家も文体形式面でそうした特徴を乗り越えることが望ましいという考えをうち出すものである。『女性的想像力』の著者パトリシア・スパックスは，過去においてこのような考え方を，論理的，客観的な文体を通して実践した代表的な作家として，ボーヴォ

ワールの名をあげている。[14] 第二番目の立場は，これまで男性から女性的特質と考えられてきたものを，ほぼそのまま受け入れ，それらの資質をこそ今後女性が自らの理想的な文体，形式を築くための土台となすべきだという考えに立つものである。「私的で（中略）精妙で，官能的で，地下的な」（ティリー・オルセン）[15] 文体を新しい女性の文学にふさわしいものとして提唱し，かつ，実践したアナイス・ニンがこの立場を代表する作家としてあげられる。

ボーヴォワール的考え方も，ニン的考え方も，各々一理あるとも言えるが，いずれもつきつめれば，再び女性の人間性の否定に連なる危険性を秘めているといえる。前者の考え方は，ボーヴォワール自身が実生活において，子供をもつことを拒否したことに示されるように，女性が限りなく男性に近づくことが理想視されることをも意味しかねず，それは，極端に走れば『女たちから女たちへ』を書いたシュラミス・ファイアストーンが唱えるに至ったように，試験管ベビーを女性解放の究極の手段とみなすような悪夢的な未来社会のヴィジョンにもつながりうる。一方，ニン的考えは，逆に女性をかつての「女性性（フェミニニティ）」の檻の中に引き戻すばかりでなく，過去の男性による「男根崇拝」の裏返しとしての「子宮崇拝」をも生み出しうる。ニンの次の一節はそうした可能性のおぞましさを十分想起させるものというべきであろう。

〔女性の創造〕は男性のそれとは全く異なるものであるべきだ。それは子供を産む行為と正確に相等しいものでなくてはならない。（中略）言いかえれば，女性自らの血から受胎され，子宮によって守られ，女性自らの乳から養分を得たものでなくてはならない。[16]

そこであげられるのが第三番目の立場，即ち，かつてヴァージニア・ウルフからも称揚された両性具有性（Androgyny）を最高の状態とする立場である。これは，ユング等の心理学者からも指摘されたように，人間には本来男女の性別にかかわらず，男性的要素と女性的要素が共に備わっているという見方に基づくものであり，これら双方の性格をバランスよく調和する方向に向かうこと——これが両性具有の理想とされる。文体にそくして言えば，客観的にして主

観的，論理的にして直観的といったものが高い評価を与えられることとなる。

以上三つの立場のうちでは，第三の立場，即ち両性具有性を理想とする立場が最も支持を受けやすいことは明らかであろう。というのも，この考えに従えば，女性は自らの内なる女性性と男性性のいずれをも抑圧することなしに，そのトータルな人間性を確保しうることになるからである。事実『文化的アンドロジニーの定義に向けて』を書いたヘイルブランをはじめ，相当数のフェミニスト文学批評家達がこの立場への傾斜を明らかにしている。

しかし，長い目で見れば，両性具有性を究極の理想とする考え方にも疑問が残る。仮に両性具有をフェミニスト文学の最高の境地と規定した場合，今後すべての文学がその実現に向って進むべきであるということにもなりかねず，そうした可能性に内在する危険は明白というべきだろう。文学は他のあらゆる芸術の分野と同様に，究極的には各々の作家の個人的なヴィジョンに基づくものとみるべきであり，そうしたヴィジョン，あるいはそれを表現する形式間の差異が互いに際立ってこそ，文学における多様性が保証されうるといえるからである。

また，同じことは，先述の真正な女性像についての論議に関してもあてはまる。われわれは，各々の作家の女性像がすでに常套文句と化してしまって久しい固定観念に基づくものであることを指摘することは可能だが，彼等に対して，かくかくの女性像を創造すべしということはできないのである。

結局，望ましい文学作品の規範や基準といったものを示すことにおいては，フェミニスト批評家といえども——というより，フェミニスト批評家だからこそ——最大限の注意を払わねばならないことが指摘されよう。というのも，それは，過去において男性批評家達が，自らが一方的に定めた規範や基準を普遍的なものとみたて，すべてをそれに従わせようとしたことと同じ愚を犯すことに連なるからである。

トリル・モアも述べているように，人は，誰しも，「文化的，社会的，政治

的，個人的要因によって形成された特定の立場からしか発言できない」[17] のであり，それ故，各人が拠って立つ自らの基盤の限界を再確認することが先ず何よりも重要だというわけである。レジスターらの熱意にもかかわらず，基準を模索する批評が当初期待されていた程広がりを見せていないのも，一つには，以上のような認識が作用したものといえよう。

但し，両性具有論をはじめとするこのグループの批評の成果のすべてが不毛であると主張することは，無論，妥当ではない。両性具有論に関して言えば，それは，どちらかといえば，個々の作家の文体，形式よりも，文化全体に求められるべきものといえる。というのも，これまでの文化が男性中心に傾きすぎ，そこに相容れられないすべての要素を抑圧してきたことは確かであり，今後，フェミニスト的視点に立つ批評家，研究者，作家等の努力により，文化全体がよりバランスのとれた——即ち，より「両性具有的」な——ものになれば，個々の作家が自己の資質を最大限に表現できる状態——即ち，多様性が許容されるという理想の状態——が生み出されることになるからである。

また，基準模索の批評全体に関しては，すでに述べたように，単一のフェミニスト的規範あるいは基準といったものでもって全作品を裁断することは今後ともあってはならないことといえるが，これまでの男性中心の批評が陥いってきた大ざっぱさ，無神経さといったものを指摘するには大いに効力を発揮することが期待される。ドロレス・シュミットの次の文はそうした批評の好い例である。

> 私にはすでにとりあげられた作家達の文学的業績を引き下ろすつもりは毛頭ない。ヘミングウエイ，ルイス，フィッツジェラルドは，国内外を問わず，20世紀の巨大な作家である。しかしながら，これまでの批評的判断のあり方に関しては再考する必要があると考える。とりわけ，「リアリスティック」だとか，「鋭い社会的観察者」だとか，「テーマや価値において普遍的」だとかいった，圧倒的な批評用語を応用する方法に関しては特別な注意を払う必要がある。そうした用語は特定の男性的な見方を示しているにすぎず，しかもこの場合，時代から脅やかされていると感じているある特定の男性的な見方を反映しているにすぎないからだ。[18]

3. 女性作家中心のアプローチ

最後の女性作家中心のアプローチをとるタイプの批評は80年代以降特に盛んとなり，注目をあびているものである。この批評の最終的な目標は，女性作家を一つの集団とみなし，彼女達の作品における共通のテーマ，表現方法を抽出，分析したうえで，これまでの公式な文学史の陰に埋もれてきた女性作家達のもう一つの伝統，あるいは，文化的遺産といったものを表面に浮上させることにある。この批評は，一見したところ，先述のニンの考え方と似通った立場に立つものとも考えられるが，実際には，両者の間には，大きな隔りが存在する。というのも，ニンの場合，明らかに，一連の「女性的」資質を，生物学的に避けられない与件とみなす傾向にあったのに対し，このアプローチをとる批評家は，女性作家に「固有」の諸々の特質の存在そのものは認めるものの，それらが，むしろ，女性作家を「亜流」という名のサブ・カテゴリーの中に位置づけてきた過去の因習に由来するものとみなすからである。

この批評の最もよく知られている例を二書あげるとすれば，多くの人が，エレン・モアーズの『女性と文学』とエレイン・ショワルターの『彼女達自身の文学』をあげることだろう。これらは，いずれも，このアプローチを初期に試みた古典的部類に入る研究書であり，共にパイオニア的な書のみにみられるみずみずしさと限界を共有する書といえる[19]。

先ず，エレン・モアーズの『女性と文学』だが，ここには，ブロンテ姉妹，スタール夫人，サンド，ストウ夫人といった，米英仏にわたる「偉大な」女性作家がとり上げられており，そのいずれもが，同胞の男性作家に負けず劣らず，自由，名声，冒険，エロス的な愛といったものを志向しながら，それらを作品内においては直接語る方式をとらず，各々家庭小説，ロマンス小説，女性版ゴシック小説といった様々なジャンルの中に，擬装された形で表現したことが明らかにされている。本書が着手され始めたのは1963年というから，丁度今回の女性解放運動自体の火付け役をなしたベティ・フリーダンの『新しい女性の創

造』が出されたのと同じ年ということになる。この符合は，偶然とはいうものの，重要であるように思われる。というのも，「女性が男性と対等の立場で主流の文化に分け入る」ことを何よりも重要とみなしたフリーダン同様，モアーズもまた，女性作家達が，野心，名声，冒険といったものへの基本的な志向においては，「主流」の男性作家と変わりがなかったことを力説しているからである。また本書の全篇を通して，女性作家の「偉大」さがくり返し賛えられていること，あるいは，女性作家の先にあげた志向に対して，「ヒロイズム」から派生した造語「ヒロイニズム」という呼び名をあてていること等々から，モアーズが，——丁度，若い世代の運動家達から「体制内変革者」とのそしりを受けたフリーダンと同じように——今日のフェミニスト批評家達から，男性の価値観やそれに基づく分類法から抜けきれない点を非難されるに至っているのも，パイオニア的存在としては，致仕方ないことというべきであろうか？

これに対して，エレイン・ショワルターの『彼女達自身の文学』は，サブ・カテゴリーとしての女性文学の特殊性といったものに，はるかに鋭敏な感受性を示している。ショワルターは，これまでの女性文学の流れを三つの段階に分けて考える。第一の段階は，女性作家が既存の男性の価値や規範をそのまま受け入れる「フェミニン」な段階である。第二の段階は，それらに対して異議を唱える「フェミニスト」の段階である。第三の段階は，女性が自己発見をはかる「フィーメイル」の段階である。女性文学にみられるこうした展開の仕方が，多かれ少かれ，黒人やユダヤ人等の少数民族（エスニック）集団の文学にも共通してみられることを指摘することによって，女性文学もまた，全体として一つのマイノリティ文学を形成するという著者の主張はきわめて強い説得力をもって示される。[20] また，本書には，ブロンテ姉妹，エリオット，ウルフ等の，既によく知られた女性作家の他に，数々の無名の女性作家の名も言及されており，既存の男性的価値体系による格付けの序列から自らの視点を引き離そうとする著者の姿勢が明瞭に読みとられうるものになっている。しかしながら，本書の場合にも，女

性作家を，どちらかと言えば，支配的な男性文化における被抑圧者，あるいは，犠牲者としてみる傾向の方が顕著であり，男性文学に拮抗するところの固有の価値や感性をもつ，独自の女性文学の伝統を掘り起こす地点まで到達しなかったという点では，未だに不満の残る書ともいえる。

そこで，女性中心の分析書のうちで最後にとりあげてみたいのが，ニナ・オーレンバック著の『女性の共同体』である。本書は，一応専門家の間では高い評価を受けているものの，一般的知名度の点では前二者に比べてはるかに劣る書といっていい。また，本論を構成する全四章のうち一章のみであるが，男性作家であるジェイムズとギッシングに費やしている点で，必ずしも，女性作家中心のアプローチの範疇に入れるべきでないかもしれない。しかし，本書は女性作家の隠された文化遺産を掘り起し，その中から，男性文化の価値体系そのものを覆しうる固有の女性の価値ともいうべきものを導き出そうとしている点では，はるかに積極的な姿勢がみられ，かつ説得力があるので，最後に一考しておく価値があるように思われる。

序論で，オーレンバックは，題名ともなっている「女性の共同体」の概念を，対の概念たる「男性の共同体」のそれと比較・対照させつつ，次のように明らかにしてゆく。伝統的に「女人禁制」の男子のみの団体は，——例えば，各種の紳士向けクラブに代表されるように——，メンバー全員に選ばれた者としての自覚や誇りを植えつける特権的な場としての機能を果たしてきた。当然，そこへの加入は，外部の一般社会からも，名誉ある出来事として，賛えられることになる。全く逆のケースが女性のみの団体である。そもそも，女性だけの集団を組織すること自体，何かしら，いかがわしく，「反社会的」な行為として，受け取られがちであったことは否めない事実といえる。その理由として，オーレンバックは，従来の父権制的な体制の中では，女性が各々，孤立した状態で，父や夫たる男性に従属して生きることが理想とされてきたことをあげている。つまり，女性が群れ，集い，女性のみの自足したグループを作ることは，父権

制社会を構成する基盤自体を危うくする意味合いをももちうるというわけである。[21]

しかしながら，オーレンバックは，そうした禁止・抑圧にもかかわらず，ギリシヤ時代から今日に至るまで「女性の共同体」への夢が途切れることなく存在し，数々の女性作家がそれを自らの作品の中に，現実の形をもつものとして提示してきたことを明らかにする。ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』，ルイーザ・オルコットの『若草物語』，ギャスケル夫人の『クランフォード』，シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』等々がその代表的例であり，これらの作品内において，「女性の共同体」のテーマがいかに掘り下げられたかを分析し，かつ，作品自体に新しい意味と意義を見出すことが本書の狙いというわけである。

一口に「女性の共同体」といっても，作品内では様々な形をとって示される。例えば，『若草物語』では女性のみの家族共同体，『クランフォード』では，女性の住民によって構成される町，『ヴィレット』では女学校という具合いである。しかし，いずれの場合にも共通して示唆されるのは，男性のいない空間における女性同志の関係ののびやかさである。もはや妻・恋人・母といった社会的性役割に縛られない彼女達は，自由とくつろぎに満ちた対等の関係をわが物としていることになっている。また，いずれの女性作家も強調しているのは，メンバー間の絆の強さである。それは，あたかも，女性は一般に集団を作っても，必ず反目し合い，離散するという従来の固定観念に女性作家自身が挑戦するかのようである。注目すべきことは，そうした絆が，共に権力機構から外された者としての自覚に基づく互いの「痛みへの共感能力」に由来するものとされていることである。またこれらの女性の共同体は，男性社会の場合のように，明確に言語化された法や規則に依存せず，絶えず，微妙なやりとりやジェスチャー等によって形成される目にみえない規範によって自発的に作り出されるものであるだけに，より強靱な結びつきをもつものとされる。

さらに著者は，非公式な男性共同体を扱う作品（例えば，『モービー・ディック』や『ハックルベリー・フィンの冒険』）の場合には，往々にして「探求」が主要なテーマとされ，周囲の自然環境と闘いつつ，自らの領土を広げようとする男性ヒーローが主人公とされるのに対し，女性の共同体を扱う作品では，女性の登場人物が周囲の環境と親和的な関係を保持していることを明らかにする。驚くべきことに，本書でとりあげられている六作品中四作品において，女性の共同体の外に広がる男性社会において戦争が続行中という設定になっており，従来の男性社会を特徴づけてきたあくなき征服欲，権力志向，競争心といったものへの女性作家の批判の眼ざしが示唆される。

こうして著者は，「女性の共同体」に対する女性作家達の共通の理解や期待を明らかにしてゆく過程で，既存の男性文化に内在する価値体系全体に対抗する女性の価値といったものの内容をも明らかにしてゆく。これらの価値——即ち，反権力，弱者へのいたわり，自発性，環境との親和的な関係等々——は，元来，男性文化——とりわけ，近代産業社会の成立以降の男性文化——の枠内では，消極性，非合理性，向上心の不足，独立心の欠如等々といった名の下に否定的評価を受けてきたものといってよい。それらを改めて，女性の視点から正の価値としてよみがえらせようとするオーレンバックの姿勢は，今日，女性作家中心のアプローチをとるフェミニスト批評家達の殆どに共通してみられるものといえる。

しかしながら，この時点で，これらのフェミニスト批評家達は新たに困難なディレンマに遭遇することになる。問題は，ここで肯定的にうち出された女性独自の価値をいかにして社会全体に広げうるかである。つまる所，それらの価値自体は，女性（そして女性作家達）が，中央の権力とは無関係の周縁的な立場に位置していたからこそ，育まれたものともいえるからである。少くとも，ここでとりあげられた作品内の女性の共同体の成員には，外部の男性社会に進行中の戦争をくいとめる力など到底もちえなかったのである。

しかし，オーレンバックは，『女性の共同体』全体を通して，暗黙のうちに，時代は大きく変わりつつあることを告げているかのようである。この本の扉の部分に記された「アメリカで教え，執筆している女性達が構成する今なお増大しつつある女性の共同体に献ぐ」という言葉からもうかがえるように，著者が題名の「女性の共同体」に託した意味はきわめて大きい。それは，単に虚構（フィクション）の中の「女性の共同体」にとどまらず，「女性作家の共同体」，そしてさらには，女性作家を研究するすべての「女性批評家並びに研究者の共同体」をもさすものとみてさしつかえないだろう。そうした共同体が一つにまとまり，今後さらに増大する時，女性の価値が中央の男性社会の価値体系を切り崩しうる力をもつことも，あながち，夢ではなくなるというのがオーレンバックの主張である。『女性の共同体』は，その意味で，女性作家と女性作家中心のアプローチをとるフェミニスト批評家全員への，著者からの最高の献辞とも受けとられよう。

Ⅳ. む す び

以上，アメリカにおけるフェミニスト文学批評の流れを，1)過去の「男根的」文学作品あるいは，批評を批判するもの，2)望ましい基準模索の批評　3)女性作家中心のアプローチをとるもの，というように，三つのグループに分けて考察してきた。過去十数年間におけるこうしたアプローチ上，あるいは，関心の対象上の変化を，われわれは，どのようにして説明付けられるだろうか？それは，一言で言えば，長きにわたって「他者」，あるいは，「人間以下」の存在として定義づけられてきた女性が，それに対して「異議申し立て」を行い（第1のグループの批評の段階），自身が男性と相等しい価値をもつ「人間」であることを確認し（第2番目のグループの批評，とりわけ，それが行き着いた両性具有論の段階），然る後に，改めて，過去において男性のみから定義づけられてきた自らの「女性性」の内容を，主体的に再評価しようとする（第3

番目のグループの批評段階）動きだったとみることが可能であろう。

ちなみに，フェミニスト文学批評のこうした推移は，米国の黒人文学が，過去数十年間に辿ってきた道程ときわめて類似していることを指摘しておきたい。即ち，リチャード・ライトの「抗議の文学（プロテスト・リタラチャー）」から，人種の差を越えた純粋にして「普遍的な芸術作品」を志向したジェイムズ・ボールドウィンの段階を経て，最後に，黒人独自の文化的遺産をその根元（“ルーツ”）にまでさかのぼって再評価しようとする，今も活躍中の，アリス・ウォーカーやトニ・モリスンにまで至る過程である。

そこで，今後の方向性に関してであるが，黒人文学同様，フェミニスト文学批評も，ここ当分の間，第三番目の段階，即ち自らの女性としての独自性を究めようとする傾向が続くであろうことが予測される。というのも，これまでのあらゆる固定観念，社会通念，思いこみ，等々を捨て去った後，改めて，「女性として生きることの意味はいかなるものか？」という問題に直面する時，われわれは，この問題がいかに考察の対象として，未開の領域であるかにうたれるからである。何といっても，女性が自らの視点から女性であることの意味について，互いに協力し合いつつ，考察し始めてから，わずかな期間しか経ていないのである。

また，一口に「女性の視点」といっても，異なる立場によって，様々な種類のものが考えられ，無限といってもいいほどの多様性と広がりをもちうることも指摘しておくべきであろう。現に，80年代も後半に入った今日，女性作家中心の批評の中にも，様々な新しい流派の動きが見られる。女性中心の分析を極点にまで推し進めた形のレズビアニズムを基盤とするもの，様々な少数民族（エスニック）女性としての立場を強調するもの，フランスから導入された記号論，脱構築論といった前衛的批評理論と手を結びつつ，主として，女性の言語の問題を扱うもの，等々がその主なものである。[24]

ただ，フェミニスト文学批評家達が，最後に銘記しておくべきことは，女性

としての独自性の再評価に熱心な余り，再び新たな「女性性」の檻に自らを閉じこめることがあってはならないということである。女性同志の団結は重要だが，女性だけのユートピアは，文学作品内では可能であっても，現実世界ではありえないことに留意した上で，今後は男性批評家をも巻き込みつつ，女性であることの意味を問い続けると共に，改めて，フェミニスト的な視点から男性であることの意味についても，文学研究を通して，考えてゆく必要があろう。そうした過程を究める努力を行ってこそ，先にも述べたように，過去の一枚岩的な男性的価値の支配に終止符が打たれ，最終的には，男性的・女性的であることを問わず，あらゆる色合いの多様な価値が抑圧されることなく，個々の文学作品の中で表現されることが可能となり，それらが互いに共鳴し合いつつ，更に新たに豊かな多様性が生み出されるという理想的な状態が創出されることが期待されるのである。

注(1) Carolyn Heilbrun, "Millet's *Sexual Politics*: A Year Later," *Aphra* 2 (Summer 1971), p. 39.

(2) 米国の脱構築論の批評家，Jonathan Culler と英国のマルキシスト批評家，Terry Eagleton の二人がその代表的例。前者は，*On Deconstruction* (Ithaca, New York: Cornell University, 1982) の中に，「女として読むこと」という章を設け，フェミニズム的視点からの「読み」に関する解説を行っている。後者は，*Literary Theory* (Oxford: Basil Blackwell Publishers, 1985) の中で，フェミニズムとポスト構造主義のつながりについて述べている。

(3) Virginia Woolf, *A Room of One's Own* (London, 1929) pp. 10–12. 男性的価値基準に対するウルフの葛藤に関しては，次の二つの論文も参照されたい。小林富久子「女性作家における周縁性について」『思想の科学』7（思想の科学社，1981）pp. 52–56. 田嶋陽子「Virginia Woolf」『英語青年』（研究社，1981）pp. 318–319.

(4) ブノワット・グルー『フェミニズムの歴史』白水社，p. 16 及び p. 21 参照。

(5) Florence Howe による1976年の調査によれば，すでにこの時点で，全米の1,500の大学で，270を超す「プログラム」と15,000「コース」が開設され，8,500人の女性学教師がいたと報告されている。杉本貴代栄『アメリカ女性学事情』（有斐閣，1985）p. 207.

(6) Katherene M. Rogers の意見は，*The Troublesome Helpmate* (Seattle: University of Washington Press, 1966) に収められたものであるが，本稿では，Cheri Register の "Bibliographical Introduction" *Feminist Literary Criticism* (Lexington, Kentucky: The University Press of Kentucky, 1975) p. 4 で紹介されたものを利用した。

(7) マーリーン・スプリンガー編，小林富久子訳，『アメリカ文学のなかの女性』(成文堂，1985) pp. 167–187.

(8) Toril Moi, *Sexual/Textual Politics* (London and New York: Methuen, 1985), pp. 24–25.

(9) Kate Millet, *Sexual Politics* (Garden City, N. Y.: Doubleday, 1970) p. 58.

(10) 参考のために日本文学における女性の紋切り型に関するすぐれた論考として以下の二書をあげておく。駒尺喜美『魔女の論理』(不二出版，1976) 水田宗子『ヒロインからヒーローへ』(田畑書店，1982)。

(11) Mary Ellman, *Thinking About Women* (New York: Harcourt, Brace and World, 1968), p. 40.

(12) Cheri Register, "Bibliographical Introduction" *Feminist Literary Criticism*, p. 11.

(13) *Ibid.*, p. 13.

(14) Patricia Spacks, *The Female Imagination* (London: George Allen a Unwin Ltd., 1976) p. 16.

(15) Tillie Olsen, *Silences* よりの引用は次に掲載されていたものを利用した。Sharon Spencer "Feminist Criticism and Literature" *American Writing Today* (Washington, D. C.: United States International Communication Agency, 1982), p. 165.

(16) Anais Nin, *The Diaries of Anais Nin: 1934–1939*, ed. Gunther Stuhlmann (New York: Harcourt, Brace and World, 1967), pp. 231.

(17) Toril Moi, *Sexual/Texual Politics*, p. 43.

(18) Dolores B. Schmidt, "The Great American Bitch" *College English* 32 (May, 1971) p. 915.

(19) ここではとりあげていないが，トリル・モアはこれら二書の他に次の書をあげ，三書を女性作家の分析書の三大古典としている。Sandra M. Gilbert & Susan Gubar: *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination* (New Haven: Yale Univ. Press, 1979) なお，モアーズの『女性と文学』の原書の題，出版社等は次の通り，Ellen Moers, *Literary Women* (Garden City, N. Y.: Doubleday, 1976).

(20) Elaine Showalter, *A Literature of Their Own.* (Princeton, New Jersey: Princeton Univ. Press, 1977) pp. 3–36.

(21) Nina Aurenbach, *Communities of Women* (Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1978) pp. 1–32.

(22) 女性作家中心の批評の新しい流派を代表する著書・論文を各々紹介しておくとすれば，次のようなものになろう。レズビアニズムを基盤とするものは，Mary Daly, *Gyn/Ecology: The Metaphysics of Radical Feminism* (Boston: Beacon Press, 1978)，少数民族の立場に基盤をおくものは，Barbara Christian, *Black Feminist Criticism* (New York: Pergamon Press, 1985)，フランスの前衛的批評から影響を受けたものは，Gayatri Chakravorty Spivak "French Feminism in an International Frame" *Yale French Stuclies,* 62 (1981).